

# 『日本書紀』書名論序説

池田昌広

## 〔抄録〕

今日の我々にとって、『日本書紀』の抑もの書名は未定といわねばならない。何となれば『日本書紀』の現存古写本が凡そ「日本書紀」の標題であるのに、その撰上を唯一伝える『続日本紀』養老四年条が「日本紀」を以て喚名するからである。この齟齬に合理的解説を与えるのが書名論の具体である。私は明解の考拠を得るため、関連史料を整理したうえで先行学説から継承すべき視点を抽出した。その結果、原題を「日本紀」に認め、「日本書紀」

の名称を『日本書紀』撰上以後天平十年頃以前の所為に考えるべきを述べた。并せて、『日本書紀』の史体が六朝時代に流行した「通史」体であること、「日本書紀」の名称の発明された理由と『隋書』「経籍志」に初出する「正史」の概念の伝来とが関連しているだろ うことを述べた。

キーワード 書名論、日本書紀、日本紀、通史、正史

## 一、関連史料概観

屢ば本邦第一の正史などと説かれ、「日本書紀」或は略称の「書紀」を以て喚名されるその史書が、実は抑もの書名さえも争論の中にあること、周知である。該書について概説を試みる者は、定めて書名論の頁の設けるを常例とする。過去、書名論に関わる論説が幾許かの解決法を提出したものの、我々は未だ理解の統一に成功していない。私は

今回、書名の議論に参加するに方り既説を整理しその中から継承すべき見解を抽出し何某かの展望を得たく稿を起す。私の書名論の序論であり、序説と題する所以である。

『日本書紀』が名義の問題を抱えるのは、現存する関係史料間に、一貫した理解を拒む幾つかの矛盾点が存在することによる。解決を困難にしているのは「日本書紀」の名義の中、専ら「書紀」の二文字である。後述の諸研究がその努力を傾注した対象は偏に「書紀」両字の

解釈であつたといつてよい。その意味で、『日本書紀』書名論というばあい、それは「書紀」解釈論に換言も可能だ。私は行論の順序として、これまで先学が見出した、書名論にとって重要な史料を紹介し矛盾の那邊に存するかを、この論頭に整理し読者の参考に資そうと思う。

今日、『日本書紀』撰上を記した史料は事實上一つしかない。有名な『続日本紀』巻八、養老四年(七二〇)五月癸酉条これである。事實上一つというのは、他の『日本書紀』撰上記事は『続日本紀』該条を典拠にした、いわば第二次史料に過ぎず、校勘用に参照し得ても撰上を書き記した史料とは優先的にみなし得ない。『続日本紀』該条は次の通り、今日の『日本書紀』の歴史的地位を考えると簡略に過ぎやや素っ気ないと思えるほどの記事である。

癸酉、……先是、一品舍人親王奉勅、修日本紀。至是功成、奏上紀卅卷・系図一卷。

現行『日本書紀』には序文が無く、また当然制作されたはずの上奏文も伝わらず、編纂の経緯について確かなことをいい難い。かろうじて右引用条によつて養老四年の完成が知られるのみである。<sup>(1)</sup>書名論にとって問題になるのは「日本紀」「紀」の両表記である。右条によつたとおぼしき『類聚国史』巻一四七「文下 国史」、「日本紀略」前篇九、「新日本紀」巻一「開題」所引『続日本紀』各記事は並に略ぼ同文で「日本紀」「紀」の表記にも異同がない。<sup>(2)</sup>且つこの隣接する「日本紀」「紀」が同時に誤写される確率は常識的に低く、『続日本紀』該条に誤写の可能性は先ずないと考えられる。『続日本紀』該条の「日

本紀」の表記に間違いがないことは、『続日本紀』自身の書名がこれを明証している。

しかしながら現存古写本の標題は全て「日本書紀」に作っており『続日本紀』と齟齬を生じている。現在一に『日本書紀』の名義として「日本書紀」が通行しているのは古写本の標題に従っている訣で、抑もの書名の如何とは直接関係しない。実に書名論の具体は、この『続日本紀』と古写本間の矛盾解決に存す。

解決をより困難にするのは、奈良時代已に「日本書紀」の呼称が行われていたことを如実に示す史料の存在である。『令集解』卷三一「公式令」条所引「古記」がそれである。令本文「明神御大八洲天皇詔旨」への注記中「古記」が引例される。「古記」の文章中「問、大八洲、未知若為」に対し「答、日本書紀卷第二云、(後略)」とみえる。「古記」は『大宝令』の注釈書で天平十年(七三八)頃の成立とされる。<sup>(3)</sup>『日本書紀』撰上が養老四年(七二〇)、それから約十八年後に早くも「日本書紀」の書名が現れているのである。「日本書紀」の早い用例をみる文献がもう一つある。『万葉集』である。

『万葉集』左注に「日本書紀」「日本紀」「紀」の三様の表記が混在する。但し左注に『日本書紀』が出現するのは凡そ巻一・二に限られ他巻に及ばない。且つそれは左注に限られ題詞その他にはみられない。『万葉集』は複数次の編纂を経て現今の二十巻に増大したこと、今時の『万葉集』成立論では常識に属す。左注もこのうちの幾代目かの編者の手になると考えられ、先ずは奈良時代の用例にみなし得る。しかし左注の成立史自体が分明でないため議論の出発点さえ容易に得られ

ない。『万葉集』の研究史を略関するに「左注は、従来これといった定義もなされず漠然と読まれてきた」という評価も宜なるかなと思われる。これまでの『日本書紀』書名論も左注研究の停滞を承け、左注に混在する三様の『日本書紀』にはふれる程度で積極的関与をもたなかった。書名論の模範解答は、左注上に混在した用例をも矛盾無く説明してはならない。

さて肝心の左注該当条である。『日本書紀』の引用は左注に都合十七例現れる。<sup>(5)</sup>十七例の内わけは「日本紀」の九例、「紀」の六例に対し「日本書紀」は僅か二例に止まる。<sup>(6)</sup>混在といっても各表現の登場する比率は均等でない。また「日本書紀」が巻一冒頭部分に集中する事実は注目される。小稿は左注を云々する場でないので左注への論及は他日を期す。

先行研究を通観する前にもう一言いい添えておく。漢語としての「書紀」についてである。書名論では自明の如く説かれる理解に、「書」字は紀伝体史籍の書名に、「紀」字は編年体史籍の書名に各々區別して附されるのが常例で、「書」「紀」が混用されることはあり得ないということがある。故に書名として「書」と「紀」とが文法的等価を以て接続する事態は想定し難いという。事実、漢籍中「書紀」に題した書はみあたらない。「書紀」は熟した一語に訓めないで、後述の如く「書の紀」という解法も生まれる。

以上が書名論を展開するうえで、所与の条件になる。これより章を改め既説を通覧し并せて各説の問題点を指摘する。

## 二、先行学説概観

これまでに公刊された『日本書紀』の書名を論じた研究は少なからざる数にのぼる。各論者に小異が存するも、概ね次の三説に大別し得る。

a、「日本紀」を元来の書名に認め、何らかの理由より「日本書紀」が書名として定着したとする説。

b、「日本書」が元来の書名であり、これに「紀」が附せられ「日本書紀」の名義が生じ以後定着したとする説。

c、その他。

以下、a b c各説の要旨と問題点とを整理しておく。

『日本書紀』書名論の学説史の劈頭に在るのは伴信友の見解で、これがa説の首唱である。信友は「日本書紀、もとは日本紀と題られたるを、おおよそ弘仁の年中より、文人たちの書字を加へて、日本書紀とも称へるより起りて、遂に題名となりしと見えたり」という。『日本書紀』の原題を「日本紀」に認め、弘仁年間（八一〇—八二四）に初めて「書」字が書名に加わり現行の名称が生じたという理解である。「書」字が加えられた理由を信友は『釈日本紀』巻一「開題」に引かれた師説すなわち矢田部公望の説を挙げこれを支持している。師説については後に記すつもりであるから、此处に贅しない。

信友の論理は、さきの『続日本紀』養老四年条の記載と『日本書紀』を継ぐ『続日本紀』以下の書名とを合理的に説明しており、その部分で説得力がある。信友は「釈日本紀」に引たる、この紀の弘仁私記序に

始めて日本書紀と見えたり」という如く「日本書紀」の初例を弘仁期に設定するが、問題は前述「古記」・『万葉集』左注の用例との兼ね合いである。信友は、左注に対しては「万葉集中に、日本紀また日本書紀ともあれど、後人の勘文と見えなれば、論ふべきにあらず」と述べ事実上無視する。「古記」にはふれるところがなく用例の存在を承知しなかったのだろう。『万葉集』左注は何代目かの編者の手によって奈良時代に附されたと考えられるので、信友の処理は不可である。要するに信友は、「古記」・『万葉集』左注という奈良時代の「日本書紀」の用例を適切に説明出来ていない。

a説は略ぼ右信友の所論によって今日まで代表され、恐らく支持者の最も多い学説に思われる。次に紹介するb説はa説と全く正反対の発想からの立論である。

b説の論者の一人に神田喜一郎がいる。<sup>(8)</sup>書名に用いられる「書」

「紀」両字の用法を前者は紀伝体、後者は編年体に特定し、更に「正史」は凡そ紀伝体の史書であることを確認したうえで行論する。神田は撰述の背景をこう推測する。『日本書紀』の編纂せられたのは、中国史学史の上からいふと、あたかもこの「正史」といふ觀念のたかまりつつある時代にあたつてゐた。当時の日本として、その国威を誇示し、国際的地位を高めるには、その一つの手段として欽定の正史を必要としたに相違ない。(中略)したがつて『日本書紀』は、本来「正史」、すなはち紀伝体であることを必要としたのであるが、当時の事情としては、とても「志」や「列伝」などは出来さうになく、単に「紀」だけを作つて、それがあたかも紀伝体の三部のうちの一部であ

るかのごとく偽装せざるを得なかつたのが、実情ではなかつたか。繼いで原題を「日本書」に定める。しかし『日本書』の実質は本紀のみで志・列伝を缺く。そこで卷子本第一行に書かれた書名「日本書」の文字の下に細字で「紀」字を加え「日本書紀」に作つた。すなわち『日本書』の「紀」である。これが伝写を繰り返すうち、それもかなり早い時期に、「日本書」と「紀」が同じサイズの文字で接続され現行の「日本書紀」になつた。神田が接統の時期を「かなり早かつたと思ふ」というのは、恐らく前掲「古記」・『万葉集』左注の用例を意識したうへの推測と思われる。『続日本紀』の前掲条の処理はこうである。『続日本紀』の作られた時代には、その書名の由来がすでに忘れられてゐたらしい。しかしそれでも『日本書紀』といふ書名のをかしいといふことは、さすがに気付いたとみえて、これをその体裁や内容に相応はしく「日本紀」としてしまつた」という。「続日本紀」という「日本紀」の後とを繼いだが如き書名はこの論法の延長で考えられる。要するに『続日本紀』にみえる「日本紀」の文字は原題を反映しておらず『続日本紀』編纂者による推定、結果的な改変に過ぎないとする。

神田説の要旨は右に尽きるが、凡そ文献的証拠を缺くのが大きな弱点だ。先ず『続日本紀』前掲条の処理である。『続日本紀』前掲条は形式的には他史料からの引用文ではなく『続日本紀』編纂者の手になる文と考えられる。そこで神田は後世すなわち『続日本紀』編纂者独自の用字に処理するが、文献読解の方法上問題である。『続日本紀』前掲条の理解は、編纂時に存した原史料にもとづきその文字を反映し

記述されていると先ず考えるべきで、編者の恣意によつたとするには有力な証拠が必要である。神田はそれをいわない。更に、「日本書紀」の初例は前述の如く「古記」と『万葉集』左注とである。奈良時代に「日本書紀」の書名の行われていたのは確実だ。果たして養老四年撰上の『日本書紀』が、奈良時代において「日本書」と小字「紀」と接続されてしまうほど頻繁に書写されたか疑問であるし、抑も斯くも杜撰な鈔写がなされたかどうか疑わしい。

神田とは立脚点が異なるが、同じくb説に分類できる粕谷興紀の所説がある。神田が「日本書<sup>(9)</sup>」の原題を認定するのに対し粕谷は撰上当初から「日本書紀」であつたという。粕谷の論拠は、承平の『日本書紀』講書の講者を務めた矢田部公望の推定である。『新日本紀』巻一「開題」所引「日本書紀私記」に残るその問答を引こう。

問、此書名日本書紀、其意如何。答、師説、依注日本国帝王事、謂之日本書紀。

又問、不謂日本書、又不謂日本紀、只謂日本書紀、如何。答、師説、(中略)、但宋太子詹事范蔚宗撰後漢書之時、叙帝王事謂之書紀、叙臣下事謂之書列伝、然則書紀之文依此歟。

「師説」以下が公望の返答である。公望は、劉宋の范蔚宗すなわち范曄が『後漢書』を撰した際「帝王事」(本紀に該当するようだ)を「書紀」と称した故事を引用し、「日本書紀」の「書紀」はこの范書の用法に倣つた名義だという。但し疑問の助字「歟」を文末に配するの推測であつて、公望にも明証のある訣ではなさそうだ。何しろ「日本書紀」撰上から二百年餘が経っている。

現存「後漢書」諸本中、「後漢書紀」に題するテキストの存在を聞かないが、文化文政期に幕府の書物奉行であつた近藤正斎と近代の歴史地理学者小川琢治とが、内題を「後漢書紀」に作つた『後漢書』異本の過去存したことを論じ「師説」に論拠を提供した。<sup>(10)</sup>粕谷の「師説」支持の論拠も両者に依拠している。

正斎が実見した本は関東大震災で焼失し伝わらないが、偶々大矢透『仮名遣及仮名字体沿革史料』(帝国学士院、一九〇九。勉誠社、一九六九複製、四九頁)に該本本紀巻一の巻頭四行のみ「影摹」され今日みるを得る。該本は宋本を覆刻した元大徳刊本とされる。粕谷等が注目するのはこの二行目空白部分に為された書込みである。それによれば記入者が「家本」と称するテキストでは内題を「後漢書紀」に作っていたらしい。正斎の考証は「家本」を「李唐以来久シク此際二伝ヘシ古写本」といい、他二者もこれを支持する。従つて公望が「宋太子詹事范蔚宗撰後漢書之時、叙帝王事謂之書紀、叙臣下事謂之書列伝」述べたのは空論でなく明確な論拠にもとづくという。

なお、右「後漢書」異本問題で興味深い報告がある。平田篤胤『古史徴』巻一之春つまり「開題記」の『日本書紀』の書名に及ぶ部分である。篤胤は前述伴信友の所説を紹介し支持を表明するが、粕谷等の説にとつて興味深い記載はその直前、篤胤の自注にあらわれる。右記「師説」を引用した後「旧く皇国に伝へたる漢書は、漢書紀と有し由、屋代弘賢ぬしの伝へ語られき。然れば書紀といふ号は、漢書の題号に依へりと云る、新紀の説は違ひ有まじくこそ」と続けるのがそれである。<sup>(11)</sup>篤胤の記述は簡略に過ぎ具体を缺くが、正斎等が推定した

『後漢書』異本の例と照らし合わせれば、巻首内題の「漢書紀」に作られたテキストの流伝をいったものと思われる。但し屋代弘賢からの伝聞を実証する古本の現存を聞かない。

さて、我々は右問答によつて承平の頃(講書は同六年(九三六)から二、三年をかけ行われただろう。)已に『日本書紀』の書名の由来が分明でなくなっていたことを知る。『日本書紀』撰上から二百年餘り経つ。公望の発言は二百年後の推定である点を割り引かなくてはならない。

ところで何故范曄『後漢書』なのであろうか。小島憲之の出典研究によれば潤色に利用した史籍は先ず班固『漢書』を数え、范書の利用頻度がそれに比し少ない。<sup>(12)</sup>何故、故らに范書を手本に命名したのか、説明の欲しいところである。或いは篤胤「開題記」紹介の「漢書紀」の例から『漢書』を範にしたといひ換えてもよいのか。

もう一つ疑問点。范書撰述時に「叙帝王事謂之書紀、叙臣下事謂之書列伝」であつたという話柄を、私は寡聞にして漢籍中にあるを聞かない。公望の経歴は粕谷論文に譲るが、紀伝道出身ということは中国史学の専門家というべきで、公望在世当時「三史」の一であつた范書についても相應の知識を所有していたらうことはいつてよい。しかし件の話柄は今のところ公望の発言にのみ見られる訣で、公望が斯く認識していた事実を明かし得ても、果たして史実であるかは別途議論せねばならない。『続日本紀』前掲条と『続日本紀』の名義との兼ね合いについては前記神田説と大同小異で、神田説に加えた批判がこゝでも有効である。

書名論としては比較的最近発表された中嶋俊彦の論考はb説支持である。<sup>(13)</sup>中嶋は「日本書紀」が書名として奇異でない論ずる。史部書の書名を調査したうえで、「『日本書紀』の編者はそれまでの中国で、『五代史伝』や『五代史志』といった、正史の構成要素の名前から書名をつけて単行する例があるのを知っていた」はずであること、「当時の中国の知識人の認識として『書紀』という表現はさほど不自然なものでない」かつたこと、したがって『日本書紀』編者は「日本書」の「紀」という義で「日本書紀」という書名を定めたことを主張する。中嶋の論考は「書紀」名義の漢籍の搜索に努力を傾注するが、果たして『日本書紀』以前の用例を発見できなかった。また前述「正史の構成要素の名前から書名をつけて単行する例があるのを知っていた」という指摘も推測に過ぎない。『続日本紀』前掲条にある「系図一卷」を「当初中国正史の「表」的なものを目指した名残ではないか」というがこれも推測である。なお結論は粕谷と択ぶ所がなく、同様の批判が適當である。

以上がb説各論者の論旨と矛盾点とである。

これらb説に収斂される論理の大半に對し私が抱える最大の疑團は、『続日本紀』に関連した文献処理、就中養老四年『日本書紀』撰上を告げる記事の解釈についてである。該条が「日本紀」に作ることへのb説論者の対処は餘りに輕率過ぎる。山田英雄も指摘する如く、「日本紀」の表記を『日本書紀』撰上に関するつまり該条原史料の表記に従わず『続日本紀』編者独自の推定による表記と考えるには有力な史料の裏付けが是非とも必要である。<sup>(14)</sup>b説はこれを缺く。また屢は、

史料論的論拠を示さず『日本書紀』編纂作業が中国の正史の影響下ににあることを前提にした立論も疑問である。<sup>(15)</sup> 唐太宗朝の修史事業と時期的に重なることと影響関係の存することとは一でない。

a b 説以外の「c、その他」には以下の見解がある。

まず折口信夫の独創的な意見から。折口は、『続日本紀』養老四年条に表れる「日本紀」について「日本紀は漢紀・後漢紀を学んだ「紀」の体の歴史」と述べたうえで「順序から言へば、日本紀以前に、正史体の「日本書」と言ふものがなければならぬ。さうして、其日本紀は、むさうさに謂へば「日本書」の伝であり、其「帝王本紀」を中心として、編年体「日本書」を整理したものでなくてはならない」と重ねる。「正史体」は紀伝体に同義と思われる。折口は最終的に「日本書紀なる名は、史学の知識が自由な流動性を失ひかけた頃から、始まつた誤りらしく思はれる事である。而も其は、書と紀との関係・命名法になま半可な理會を持つて居た紀伝・明経博士等のさかしらから、起つたのに相違なからう」と述べ、「日本書紀」は誤解から生じた慣用<sup>(16)</sup>に結論する。

折口説の要諦は、『日本紀』に先行する正史『日本書』の成立を認定し、『日本紀』は『日本書』を編年体に改編したものであるところにある。折口の発想の背後にあるのは、後漢の班固『漢書』と荀悦『漢紀』との関係であろう。『漢書』が通読するに大部であるため、献帝の詔により、簡略化し『春秋左氏伝』の体裁に等しき編年体三十巻に再編したのが『漢紀』である。東晋・袁宏『後漢紀』は『漢紀』に倣つて書かれた。折口によれば、『日本書紀』撰上当時、紀伝体の三

史が尊重されていた。『日本書』を三史の体裁で作った後ち、『漢紀』の制作動機と等しくして『日本紀』を両漢紀の体裁で作ったという。その証左が「日本紀」の「紀」字であり又た『日本書紀』の巻数だという。確かに、両漢紀とも三十巻で『日本書紀』に同じい。しかし『漢紀』の『日本書紀』撰上以前の将来は確認できないうえ、小島憲之の<sup>(17)</sup>出典研究は両漢紀からの潤色の有無について否定的見解を示す。

また折口は『日本書』の存在を示した証拠として「正倉院文書」の「更可請章疏等」(天平二十年六月十日付。『大日本古文書』三)を挙げる。「帝紀二巻」の下にある「日本書」の細字注記がそれである。これを『日本書』所収「帝紀」二巻に解した。しかし、小島憲之の指摘の如く、この「日本書」は「漢書(漢籍)」に<sup>(18)</sup>対置される普通名詞で「和書」の語と同義である。『日本紀』以外に、更に文献的徴証のない『日本書』なる史書の存在を想定するのは、新たな謎を生み議論を複雑にするだけである。「古記」・『万葉集』左注にみえる「日本書紀」の用例に全くふれないのも拙い<sup>(19)</sup>。

松本裕美も『漢紀』に注目するのは折口に同じいが、着眼点は違う。松本は「漢紀」「序」にみえる「漢書紀」の表現に『日本書紀』命名の典拠をもとめる。「序」の問題の条は次の通り。

昔晋之乗、楚之櫛机、魯之春秋、虞・夏・商・周之書、其揆一也。皆古之令典、立之則成其法、棄之則墜於地、瞻之則存、忽焉則廢、故君子重之、漢書紀其義同矣。

右引用文の末尾を松本は「漢書紀その義同じ」に訓み、『日本書紀』編者はこれをみたという。松本によれば、『漢書紀』は「漢紀」の異

名に解される。編年体史籍である『漢紀』が『漢書紀』とも名乗ったとすれば、『続日本紀』がいう『日本紀』も『日本書紀』と称されてもよい、という論法である。

松本の見解は『日本書紀』編纂が『漢紀』を参照して行われたという前提に立っているが、これは大いに疑問である。折口説への批判の中で既述したが、『漢紀』からの文章潤色は今のところ考え難い。撰上以前の舶載も確認できず、松本の前提は根拠がない。<sup>(20)</sup>

最後に小島憲之の所論にふれておく。<sup>(21)</sup>小島説の特徴は「日本紀」「日本書紀」の併存関係を認める点にある。すなわち、前者を「国史」(日本の史書)を示す普通名詞に後者を「述作物としての書名」に解釈し、奈良時代の両名並用を推定した。『万葉集』左注に「日本書紀」「日本紀」の混在する原因をもこの論法で説明した。また、前掲『続日本紀』養老四年条の「日本紀」の表現は「当時の史書としての通称」であって、上代人の書名への感覚は大らかであったと、現代人との文字表記の感覚的相違を以て解釈した。

小島が「日本紀」を普通名詞に解した文献的根拠はやや時代の下った「日本後紀」である。<sup>(22)</sup>確かに平安時代「日本紀」の用法中、国史の語義に略は等しい普通名詞化した「日本紀」がみられることは事実<sup>(23)</sup>に認められる。しかし『日本書紀』撰上以降その間に「日本紀」の用法に一部変容があつた可能性があり、撰上当初から普通名詞であることの論拠にはならない。更に、『日本書紀』に続く国史が「続日本紀」という「日本紀」を継承した名義を名乗っており、これが「通称」にもとづくとは考え難い。<sup>(24)</sup>

これで『日本書紀』の名義を論じた主要な見解を説き終わる。これを要するに、今日我々の目にし得る書名論関連諸史料を一貫した論理で矛盾なく説明した研究は未だ現れていない。

### 三、書名問題解決へ向けて

書名は闇雲につけられるのではない。命名の意図はさまざまだが、第三者による通称でさえ説明に耐える何某かの由緒が必ずある。書物命名の本質、少なくともその一つは、その書籍に関する情報の付託にある。名義の付与対象の制作目的或は編著者の希望、命名の対象書籍と縁<sup>ゆかり</sup>のある人名地名等の固有名詞といった何某かの情報が書名には込められる。そうして与えられた書名は書籍の実態と何らかの事情を共有している。順序として書名の理は書物の理でもある。この実に当たり前のことが従来の書名論ではやや等閑視されて来たのではないか。「紀」「書」の漢土での用法の詮索に偏り、『日本書紀』自体の姿への観察が疎かであった嫌い無しとしない。書名論に参画する者はこの書名に盛込まれた情報を読み解かなくてはならない。我々の現実に目睹している書名は『続日本紀』前掲条等にみえる「日本紀」と古写本他の書留めた「日本書紀」との二種しかない。もう少し限定を加えれば「紀」と「書紀」とである。この都合三文字が表現する情報を過不足無く読むこと、書名論はこれを銘記して想を馳せなくてはならない。「日本書」はあくまで推測の産物に過ぎず、当面の考察からは除外される。



中国の史籍、特に官撰の史書を読解した幾ばくかの経験の所有者は、『日本書紀』閱讀の第一頁より恐らく奇異の感想をもったものではなからうか。通常『日本書紀』は中国の史書を手本に編綴されたと説かれている。常識的に、直接には朝鮮半島就中百濟撰述の史籍を参考した可能性を残しながらも、中国の修史に影響を受けたこと、略ぼ定論に思われる。奇異に感ずるのは冒頭の天地開闢から始まる神代卷の存在である。斯くの如き体例を持った史書を現存漢籍中に見出し難い。漢籍史部書に範をとったはずの『日本書紀』に類似の漢籍が見当たらないのは、どうしたことであろうか。奇異を感ずる主因は、この撞着にある。

『日本書紀』の体例は通常、編年体といわれる。確かに間違いない。しかし『漢書』『藝文志』以来の現存漢籍目録を一覧するに、史部の分類の一項として「編年」類が登場するのは『旧唐書』『経籍志』を嚆矢とし以後定着する。幾分詳細をいえば旧志は、開元年間、母舅の撰した『古今書録』四十巻を流用したものである。開元九年（七二一）殷践猷等により『群書四部録』二百巻が成り、後ちにこれを四十巻に略編したのが『古今書録』である。旧志上卷（『旧唐書』卷四六）に冠せられた旧志の序文には「乙部為史、……二曰古史、以紀編年繁事」といい、類目を「編年」でなく「古史」に呼んでいる。これは『隋書』『経籍志』を踏襲した類目である。しかし旧志本文では「乙部史録、……正史類一、編年類二、……」とあり「編年類」を称している。「史録」の文字からも明白であるが、『古今書録』の類名としては「編年」をとるべきで、『古今書録』は「古史」でなく「編

年」の類目を採用した極初の例とみなせる。<sup>(25)</sup>『群書四部録』の成った開元九年が日本の養老五年、すなわち『日本書紀』撰上の翌年である事実をふまえれば、『日本書紀』が編年体であるとは単純にはいえない。恐らく、『日本書紀』の実態を編年体と称することは許されようが、『日本書紀』編纂者の頭脳にあったのは「編年」の史体ではなさそうである。

では『日本書紀』の体例とはどういったものか。その問いは、『日本書紀』が範とした書——卑俗な言い方をすれば種本——の体例を問うているに同じい。私見ではその体例は『日本書紀』の原題によって表現されていたはずの史体と思われる。

論頭に引用した『続日本紀』の『日本書紀』撰上を記した条文の「日本紀」に誤写がないとすれば、書名論の議論の方向は、「日本紀」が何故「日本書紀」になったのか、の一方でしかあり得ない。まずは「日本紀」を原題に認めて考察を出発させ、撰上十八年後の天平十年頃に何故「日本書紀」の用例が登場したかを説明するのが望ましい。要するに、現存文献という現状を一字も変更せず合理的説明を施すに越したことはない。その意味で私に示唆を与えるのは、「日本紀」を原題に認定し「書」字を後ちの追加に考える前述伴信友の見解である。私には、この信友の説は議論の方向として正しいと思われる。

私が此処で想起したいのは、六朝時代を通じて盛行した、成立当初唯だ「帝紀」とのみ呼ばれていた「通史」という一連の史籍である。<sup>(26)</sup>呉・章昭『洞紀』、呉・徐整『三五曆紀』、晋・皇甫謐『帝王世紀』、梁・武帝の命により呉均等が編んだ大部の『通史』等がそれで、已に

散佚し現代の我々は類書などから佚文を集めた輯本しかみるを得ない。戸川芳郎はこの史体について「古史」と言い「通史」と称するこの史体は、かくて後漢に興起した経学史観とも称すべき、三皇・五帝の帝王統治を重ねあわせた礼教国家的歴史観をベースにして、細密な暦数の操作を加えた緯書説による年代観を軸にして、成立したことが理解される。」と述べた後と『日本書紀』に論及し「うえに述べた帝紀ものの「通史」に、まぎれもなく合致する史体の歴史書ということになる。(中略)「通史」の史体を摸擬して決定的な体裁をとるのは、『書紀』開巻の冒頭にある、かの有名な天地創造の一文である。(中略)天地開闢のさまを冠する史体が、魏晉のかた六朝期「通史」の常例であったことは、以上の説明で明らかであろう。『書紀』は、その体裁を踏襲したまでである(圏点は戸川<sup>(27)</sup>)と続けた。戸川の見解は、私には正当な理解に思われる。さきの撞着は模倣の対象が佚書であること、天地開闢から説き起すのが「通史」の常例であることに解決する。戸川の理解から帰納されるのは『日本書紀』は六朝史学の所産ということだ。そして『続日本紀』所載「日本紀」という名義の典実となった文献も明らかになってくる。<sup>(28)</sup>

『日本書紀』の完成は『続日本紀』によって養老四年に確定できるが、編纂開始の時期は明示する史料が無く不明というしかない。しかし、『日本書紀』成書に直接連続するかは疑問を残しながら、これに結実する修史事業の開始を天武朝にもとめることができる。それを明かすのは天武紀十年三月丙戌条の有名な記載である。すなわち、天武が河嶋皇子等十二人に「帝紀」及び「上古諸事」の「記定」を命じた

記事である。該条の指示するところについて多くが闇の中といわざるを得ない。文中の「帝紀」も固有名詞か普通名詞か明瞭でないが、少なくとも『日本書紀』述作者の表現でなく天武朝当時の意識が「帝紀」に表現したと通常解される。記定事業が『日本書紀』に結実することを含めれば、已に天武朝の修史の意識に六朝の「帝紀」の影をみるのは自然と思われる。<sup>(29)</sup>

既述の如く私は戸川の見解を支持するが、戸川は『日本書紀』書名論にアイデアを提供するに止まり、論頭に列挙した文献に添った一切の論証を缺く。書名論には、まだ実証の作業が残っている。<sup>(30)</sup>

前章に紹介したり説が「日本書」というばあい、『日本書紀』は未完の史籍に扱われることが多い。「日本書」を原名に認めた際の暗黙の了解が、「○○書」＝「紀伝体」＝「正史」という図式である。『日本書紀』の史体が紀伝体であれば、『日本書紀』は本紀のみで志・列伝を缺く不完全な史書ということになる。しかし、『日本書紀』三十巻は完結した史書に考えるべきである。「本紀のみあつて志・列伝を缺く」「当時の事情で志・列伝が出来ず本紀のみ成書した」といった方がいい方が屢ば聞かれるが、『日本書紀』編纂者は与り知らぬことではなからうか。これらの論法は『日本書紀』編纂者が志・列伝の撰述を計画したという前提、つまり紀伝体史書への志向を無条件に認定した結果必然的に現れる理解である。しかし、さきに述べたように、『日本書紀』編纂が紀伝体を志向したという証拠は全くない。紀伝体への志向という推定と、原名が「日本書」であるという推定とは相互保証的な関係にある。それは推定Aを根拠に推定Bを導き、且つ推定Bを根拠に推定A

を導くという循環論法に陥っている。

しかし、「日本紀」が「日本書紀」になったと仮定して、その「書」字の解釈について、b説の発想すなわち紀伝体史籍『日本書』の「紀」という解法は継承する価値があると考ええる。「日本書紀」という書名の最も常識的な訓みであるからだ。

このように「日本紀」から「日本書紀」への名義変容を視野に入れば、a b両説間の隔絶はそれ程深刻ではない。問われるべきは、「日本書紀」の名が登場した理由である。

これまでの書名論は紀伝体Ⅱ書と編年体Ⅱ紀とを対置した比較的単純な議論を繰り返してきた。これは『隋書』「経籍志」に惑わされたからではないか。隋志の分類は六朝の学藝を忠実に反映したものでなく、初唐の新しい学問によっている。<sup>(31)</sup>『日本書紀』との関連では、隋志が紀伝体の史書を「正史」と初めて称し史部の冒頭に置いた点は重要である。私は小稿劈頭を「屢は本邦第一の正史などと説かれ」云々と始めたが、この「正史」の概念は比較的新しいのである。六朝的な「通史」を『日本書紀』編纂者が志向したとすれば、<sup>(32)</sup>「正史」の概念を知っていたかどうか、疑問を抱かざるを得ない。但だ、「日本書紀」が「日本書の紀」であるとすれば、「古記」の成った天平十年頃までは「正史」の概念がもたらされたのではなからうか。書名問題解決の重要な鍵を握るのは、「正史」という発想の本邦への伝来時期の解明にあると、私は思うのである。<sup>(33)</sup>

## 〔注〕

- (1) しかし近年、森博達『日本書紀の謎を解く 述作者は誰か』中央公論新社（中公新書）、一九九九によって成書の過程、述作者の具体が明らかにされ、「日本書紀」研究は新たな段階に入った。私が書名問題を論じようと考えたのも森の著書から受けた刺激によるところが大きい。
- (2) 皇學館大學史料編纂所編『統日本紀史料』四、皇學館大學出版部、二〇〇一、四四六頁に各書該当条文が並列され参照に便である。なお、本文に「略は同文」といったのは、『日本紀略』が「舍人」の二字を缺くためである。
- (3) 宮部香織「大宝令注釈書「古記」について―研究史の整理と問題点―」國學院大學に日本文化研究所紀要九〇、二〇〇二が「古記」研究史と現在の到達点とを整理し利便を与う。
- (4) 市瀬雅之「左注」の物語化―『万葉集』卷十六・三八二―二三番歌の場合―同朋文学三一、二〇〇三、四頁。
- (5) 六番歌左注所引「類聚歌林」の引く「記」を『日本書紀』に解せば、合計は十八例になる。しかし、「類聚歌林」は『日本書紀』を参照していないようで、その可能性は考え難い。例えば、比護隆界「類聚歌林の編纂」上代文学三三、一九七三、一六―一七頁、吉井巖「萬葉集卷一、二の左註について―日本書紀の引用を中心に―」犬養孝博士米寿記念論集刊行委員会編『万葉の風土・文学 犬養孝博士米寿記念論集』塙書房、一九九五、一三一―一三五頁など参看。但し私は、「記曰」二字を衍字に処理する吉井説に同意する者ではない。私見は、吉井が斥けた『萬葉集精考』の、「記」を「古記録」に推定する考えに傾く。
- (6) 旧国歌大観番号でその所在を示しておく。  
「日本紀」……二四、三四、三九、四四、五〇、九〇、一九三、一九五、二〇二。

「紀」……………七、一五、二二、二二、二七、一五八。

「日本書紀」…六、十八。

- (7) 伴信友「日本書紀考」『比古婆衣』巻一、『伴信友全集』四、国書刊行会、一九〇七。

- (8) 神田喜一郎「日本書紀」といふ書名『神田喜一郎全集』八、同朋舎、一九八七。初出一九六五。坂本太郎「六国史」吉川弘文館、一九七〇は神田説支持を表明するが、「書紀の撰者に紀伝体の正史を作ろうという意志があったことを示したものは言えない」(四八頁)といい「書」字採用の動機には異見をもつようである。

- (9) 粕谷興紀「日本書紀」という書名の由来」上下、皇學館論叢一六一・二・三、一九八三。

- (10) 近藤正斎「正斎書籍考」『右文故事』並に『近藤正斎全集』二、国書刊行会、一九〇六。小川琢治「李唐本後漢書の考察」『桑原博士還暦記念東洋史論叢』弘文堂書房、一九三〇。正斎の論考はあくまで版本研究の一環であつて、公望「師説」に言及し賛意を示す口吻ながら明瞭な言辭を缺く。小川の論考も書名論の専論ではなく、主要な関心は范書の唐代鈔本の復元にある。その一部で、小川は正斎の議論を承け、焼失の圖書寮本と同一の書込み(『後漢書紀』)を持つ別本をも挙げ異本の流伝を主張し「師説」支持を表す。但し両者とも支持の具体は明らかでない。粕谷説の如く、撰上当初より「日本書紀」の名義であつたか否かを発言しない。

- (11) 『新修平田篤胤全集』五、名著出版、一九七七、書名に論じ及ぶのは五〇—五二頁。

- (12) 小島憲之「上代日本文学と中国文学」上、塙書房、一九六二、第三編第三章「出典考」。私は抑も范書の潤色利用自体を疑っている。後漢時代の歴史を記した史書は范書のみではなかった。梁代に已に失われていた

范書の志の代りにその志を合刻された晋・司馬彪『統漢書』をはじめ九家後漢書は紀伝体であり、編年体の晋・袁宏『後漢紀』、晋・張璠『後漢紀』があつた。紀伝体で現存しているのが范書のみというだけである。

范書が流行し今日に伝わつたのは唐・章懷太子李賢が施注したからである。それ以前、後漢時代の史事は後漢・劉珍等『東觀漢紀』が重んじられ、「三史」という場合も、司馬遷『史記』、班固『漢書』に『東觀漢紀』を加えたメンバーが主説であつた。李賢施注以後、范書が『東觀漢紀』に取って代り現行の「三史」の組合せとなつた。その後『東觀漢紀』は早い時期に減んだようである。范書の文章は主として官撰の『東觀漢紀』を下敷きにしており類似が著しい。潤色が范書によつたか否かは、類書に引用された『東觀漢紀』の文章がどの程度正確であつたかも知れぬ慎重な判断が必要である。また、李賢は則天武后によつて自殺させられ庶人に落とされており、名誉回復は則天武后の死後である。とすれば范書の流行も遅れ、『日本書紀』撰上以前に范書が伝来していたか否かも追考が必要である。但しこれらを述べるには一文を草さねばならない。『東觀漢紀』の間接利用の可能性については、山田英雄「日本書紀即位前紀について」日本歴史三六八、一九七九、九—一〇一頁を、「三史」の各説については、戸川芳郎「四部分類と史籍」東方学八四、一九九二、注(3)を参看のこと。

- (13) 中島俊彦「日本書紀」の書名に関する考察—中国史学史の観点から—日本文化環境論講座紀要二、二〇〇〇。

- (14) 山田英雄「日本書紀」教育社、一九七九、五〇頁。

- (15) 『風土記』編纂の目的を「正史『日本書』の構想を実現するための『日本書』『志』の資料を収集すること」に求めた見解がある(三浦佑之「日本書『志』の周辺」国語と国文学八一—二、二〇〇四。右引用はその二二頁)が、同様に論拠薄弱で私は従えない。

(16) 折口信夫『日本書と日本紀と』『折口信夫全集』一、中央公論社、一九六五。初出一九二六。

(17) 前掲、小島『上代日本文学与中国文学』上、三四七頁。

(18) 前掲、小島『上代日本文学与中国文学』上、二九二—二九二頁。

(19) 松本裕美『日本書紀、続日本紀与中国編年体史書——三の問題点をめぐって』國學院雜誌八三—一一、一九八二・一一。なお松本には先に『日本書紀から続日本紀へ——中国の修史思想と関連して』東京女学館短期大学紀要四、一九八二・二があり『日本書紀』書名問題に言及しているが、前記論文で書名論を再説しており松本の定見とみなし得るので、松本説は凡そ前者によった。なお、松本は当該「序」を荀悦の自序に認めるようだが、恐らく第三者の筆である。論拠は、范書卷六二荀悦伝所引『漢紀』自序の文が「序」にみえないこと、「序」中の荀悦の呼称が自称としては不自然なこと、「序」書出が自序としては不自然なこと、以上である。

(20) 「序」の本文引用部分末尾七文字の訓みは、松本のそれが常識的で他の訓読は俄には思い到らない。しかし、こう訓んでも文意をとり難い。もともと、松本説の要点は『日本書紀』命名者が「漢書紀」の表現を踏襲したというにあり、訓みの如何はさほど重要ではない。

(21) 前掲、小島『上代日本文学与中国文学』上、『第三編第一章 書名考』。

(22) 『日本後紀』延暦十六年二月条に『続日本紀』の編纂所を「撰日本紀所」と称している。

(23) 梅村玲美によれば「日本紀」の語は、八〜十世紀までは『日本書紀』を示す固有名詞、十一世紀には判断が微妙になり、十二世紀には「六国史の総称」の如く普通名詞の確実な用例が現れるらしい。梅村「日本紀」という名称とその意味——平安時代を中心として「上代文学九二、二〇〇四。但し、紫式部が一条帝（在位九八六—一〇一一）より受けた称辞

「日本紀の御局」の「日本紀」は、六国史の総称というのが当今源氏学の通説の由。菅原道子「日本紀の局」私考——『書紀』の受容をめぐって」びぞん八七、一九九三、二二頁参看。

(24) ここに柿村重松と中村啓信との見解を加えておく。柿村説は小島説と前掲粕谷説の中間といえる。「日本紀」の表現は「当時一般の称呼」で、「統紀の修日本紀なる文字は、猶ほ撰定律令の類と同じく、国史を修むといふ程の意にて、厳正に書名を具録せるものとはいふべからざるに似たり」と述べ小島の処理に略ぼ同じい。原題を「日本書紀」に解することは粕谷に等しい。「日本書紀」の語義を「日本書の本紀」にとるのはb説に通じる。柿村『上代日本漢文学史』第二十章 日本書紀、一九四七、二二四—二二五頁。中村は「日本紀が本来の名である」などとは一度も考えたことがないという。明確な言辭はないが「日本紀」を『日本書紀』の「別称」に認めるようである。中村「日本書紀」から「日本紀」へ」神野志隆光編『古事記の現在』笠間書院、一九九九。

(25) 例えば倉石武四郎『目錄学』汲古書院、一九七九、七二頁参看。初出一九七三。

(26) 戸川芳郎「帝紀と生成論——『帝王世紀』と三氣五運」『漢代の學術と文化』研文出版、二〇〇二参看。初出一九七六。

(27) 戸川芳郎「人間史のこと」『漢代の學術と文化』研文出版、二〇〇二、二三七—二三八頁。初出一九八五。

(28) 『古事記』序文も冒頭、生成論を説くことより起筆する。此処にも飛鳥時代より奈良時代初期にかけて本邦修史に与えた六朝史学思想の影響の濃さをみる。瀬間正之「古事記序文開闢神話生成論の背景」上智大学国文学科紀要一八、二〇〇一参看。

(29) 『古事記』序文中にも、「帝紀」の文字が二度、「先紀」の文字が一度現

れる。「帝紀」の文字は天武の詔勅中にあり安万侶の表現ではない。天武紀にいう記定事業は「古事記」編纂に直接関係しないようであるが、記紀に結実する修史事業の草創に共通する「帝紀」と表現される典籍の存在は、記紀両書に共通する開闢神話の存在と合わせ、天武朝の学藝、少なくとも史学が六朝の濃厚な影響下に在ったことを示唆しているように思われる。笹川尚紀によれば「古事記」に直結する「帝紀」・「旧辞」の完成は舒明朝まで遡及するという。笹川「帝紀」・「旧辞」成立論序説「史林八三―三、二〇〇〇。これを是とすれば奈良朝下に完成する記紀は各々、筆録開始の欽明朝前後から舒明朝に創始される「通史」体系籍の集大成といひ得るかもしれない。

(30)

勝村哲也は『日本書紀』冒頭の有名な天地開闢記事の出典問題を扱い、小島憲之が首唱し通説化した唐代の『藝文類聚』利用説を否定し六朝末の『修文殿御覽』利用説をと考えた。重要な指摘である。勝村によれば『藝文類聚』天部は「六朝的な意識の後退」した構成をとっており、『日本書紀』開闢論の論理と齟齬を生じている。次いで「日本書紀神代の巻は、はからずも中国の六朝時代の通史の体例に倣って書き始められることとなったと理解したい」といひ戸川に同様の見解を示した。勝村「修文殿御覽天部の復元」山田慶兒編『中国の科学と科学者』京都大学人文科学研究所、一九七八、六四五―六四八頁。私見では神代巻のみならず三十巻を通じて通史の影響下にあると考えられる。角林文雄も『帝王世紀』に代表される「通史」の史観の記紀への影響を指摘する。角林「『日本書紀』・『古事記』冒頭部分と中国史書」京都産業大学日本文化研究所紀要六、二〇〇一。瀬間正之も『日本書紀』開巻の生成論に六朝「帝紀」の儀軌たる可能性を説く。瀬間「日本書紀開闢神話生成論の背景」上智大学国文学科紀要一七、二〇〇〇。

(31) 前掲、戸川「四部分類と史籍」参看。

(32)

唐・魏徵等撰『隋書』が『日本書紀』潤色に利用されていること、已に小島憲之の出典研究が明かしている。前掲、小島『上代日本文学と中国文学』上、三五四―三五五頁。小島によれば、『隋書』典拠の文は『日本書紀』全巻に亘って有るのではなく、雄略紀(巻一四)・清寧紀(巻一五)に集中するようである。興味深いのはその出典が悉く高祖紀であることだ。已に詳述する紙幅に恵まれないが、今日の「経籍志」を含む『隋書』十志三十巻は、抑も『隋書』本紀五巻・列伝五十巻とは別個の編纂作業によつてそれに遅れること二十年にして成った単行の書である(隋志は六五六年成)。現行の如く『隋書』に附属されたのが何時のことであつたか明確でない。『日本書紀』編者の参照した『隋書』は志を缺いた五十五巻本であつた可能性がある。

(33)

『隋書』の舶載に関連して附言する。遣隋使の派遣回数とその年次について複数の説が行こなわれていることはよく知られる。最少で三次最大で六次の遣隋使派遣があつたとされるが、そのうち、『日本書紀』に記録を缺き『隋書』東夷伝倭国条或いは同煬帝紀にのみ伝わる遣使記事が三次ある。幾ばくかの遣隋使研究は、『日本書紀』潤色における高祖紀の利用から『日本書紀』編者の『隋書』全巻の参照を前提に立論している。増村宏が「(『日本書紀』の)遣隋使関係の記述にも当然、隋書倭国伝が参照してあると考察してよい」といふのはその一例である。増村「遣唐使の研究」第一編第三章「隋書と書紀推古紀―遣隋使をめぐる」同朋舎、一九八八、一一六頁。初出一九六八・一九六九。しかし、『日本書紀』編者が『隋書』の東夷伝と煬帝紀とを参看したとすれば、何故その遣使記事を推古紀に採用しなかつたのか、少なくとも言及しなかつたのか疑問を生む。仮に『隋書』所載遣使記事を誤伝として、『日本書紀』編者がそれを知つて敢えて無視したのだろうか。比較的最近の鄭孝雲「遣隋使の派遣回数の再検討」立命館文学五五九、一九九九は三次説

を主張するが、その三次は並に推古紀の伝える遣使で『隋書』のそれを凡て排す。その是非は兎も角、『日本書紀』編者のみた『隋書』が煬帝紀や東夷伝を具備した足本であったか、私は疑っている。抑も鈔本時代の漢籍船載は、小規模の書籍は別にして通常不全本の将来を先ず念頭におくべきで、高祖紀の利用が確認されることは直ちに足本の船載を意味しない。それをいうには別個の論拠が必要である。『日本書紀』潤色者が手にした『隋書』は如何なる本であつたのだろうか。

(いけだ まさひろ 佛教大学研究員)

(指導…宮澤 知之 教授)

二〇〇六年十月十九日受理

